

芝山町大谷遺跡

— 北総中央農業水利事業 2号送水路その24工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —



平成7年3月

関 東 農 政 局

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

山武郡芝山町は、千葉県北東部に位置し、広大な下総台地を高谷川や木戸川が流れる自然環境に恵まれた地で、県下でも有数の畑作地帯ですが、農業用水を地下水や台地の浸出水に依存する割合が多く、収穫の良否も天候に左右されてきました。このため、農林水産省では、利根川河口堰及び霞ヶ浦に水源を求めることとし、既存の北総東部用水事業の施設を利用するとともに、国営北総中央農業水利事業として新たに地区内に導水する施設を建設し、併せて畑地帯総合土地改良事業等の関連事業を実施することになりました。

一方、この付近は、縄文時代の漆塗りの櫛を出土した高谷川遺跡や、形象埴輪を多数出土した殿塚・姫塚古墳があるなど埋蔵文化財の宝庫でもあります。千葉県教育委員会では用水予定地内に所在する大谷遺跡の取扱いについて、関東農政局千葉県北部農業水利事務所と協議を重ねた結果、発掘調査による記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は、千葉県教育委員会の指導のもと、千葉県文化財センターが平成6年度に実施しました。その結果、縄文早期の良好な包含層と古墳の周溝を検出するなど、貴重な成果をあげることができました。

このたび、その整理作業が終了し、報告書として刊行することになりました。本書が学術資料としてはもとより、芝山町周辺地域の歴史を知る資料として、また、文化財の保護普及のために広く活用されることを願っております。

終わりに、発掘作業から整理作業、報告書の刊行まで終始御指導、御協力をいただいた千葉県教育庁生涯学習部文化課をはじめ、関東農政局千葉県北部農業水利事務所、芝山町教育委員会、関係諸機関各位に深くお礼を申し上げるとともに、発掘調査、整理作業に当たられた調査補助員の皆様にも心から感謝の意を表します。

平成7年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 奥山 浩

凡 例

1. 本書は千葉県山武郡芝山町大里字大谷1075-1に所在する大谷遺跡おおたにの発掘調査報告書である。遺跡コードは409-029である。
2. 発掘調査及び整理作業の実施は、関東農政局千葉北部農業水利事務所の委託により、千葉県教育委員会の指導を受けて、財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 発掘調査は、平成6年10月3日から10月31日まで下層確認・上層本調査を実施し、整理作業は平成6年11月1日から同年11月30日まで行った。発掘・整理作業とも主任技師平野雅一が担当した。
4. 本書は、成田調査事務所長矢戸三男の指導のもとに副所長宮重行、主任技師宮城孝之、矢本節朗の協力を得て平野が執筆、編集した。
5. 第1図の地形図は国土地理院発行の5万分の1「成田」を使用した。
6. 第2図の地形図は千葉県発行の「成田都市計画 1X-KF 93-4」2,500分の1を使用した。
7. 本書の遺構の縮尺は古墳を1/160、土坑を1/80、溝を1/250とした。

本文目次

序 文 凡 例 目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 周辺遺跡	1
3. 遺跡の立地と環境	2
4. 調査の方法	3
5. 遺構	5
6. 遺物	8
7. まとめ	12

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	1	第5図 005・007・006・004号跡遺構図	7
第2図 周辺地形図	2	第6図 出土土器	9
第3図 遺構配置図	4	第7図 出土土器	10
第4図 001・002・003号跡遺構図	6	第8図 出土遺物（土製品・石器）	14

図 版 目 次

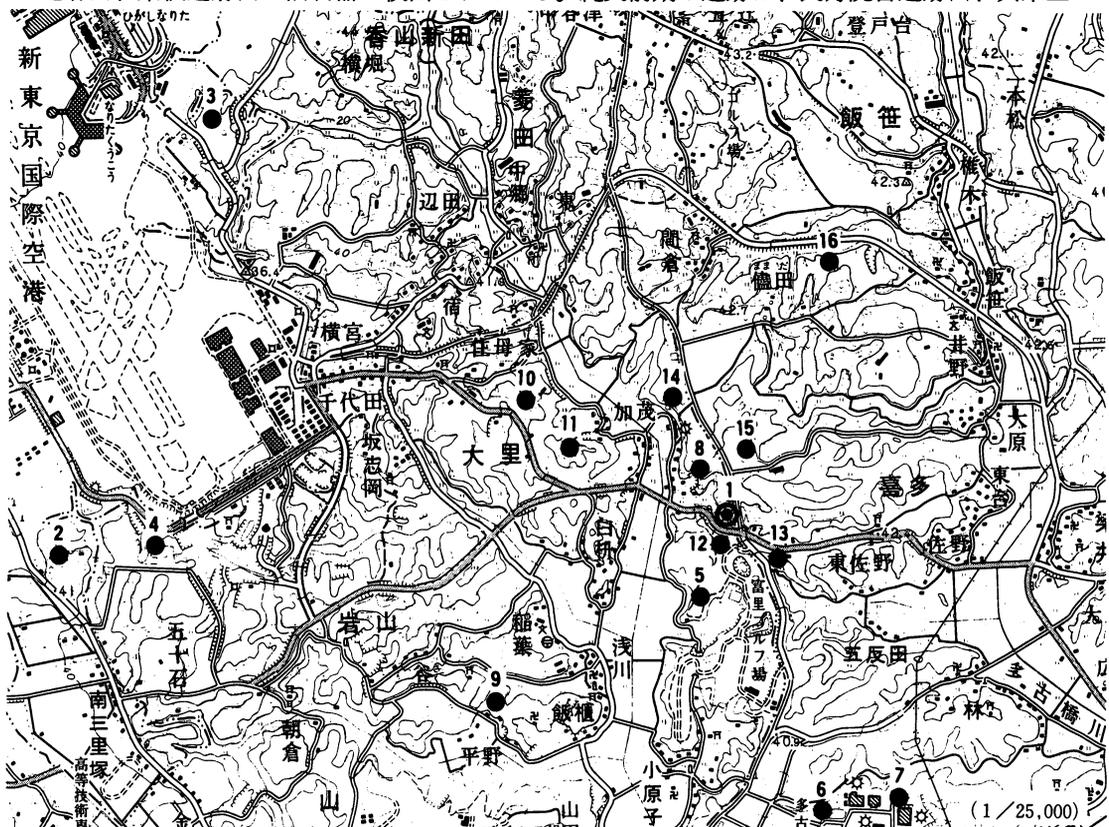
図版1 調査区全景及び遺構
図版2 出土遺物

1、調査に至る経緯

農林水産省では、北総地域の畑3,600ha、水田500ha計4,100haの灌漑水の確保と、農業経営の安定化と近代化をめざし、国営北総中央農業水利事業を実施することになり、新たな導水施設を芝山町大里字大谷地区に通すことになった。用水予定地内には、縄文早期から古墳時代までの遺跡が存在することが知られていたため、千葉県教育委員会では、その取扱いについて関東農政局千葉県北部農業水利事務所と協議を重ねた結果、発掘調査による記録保存の措置を講ずることになり、千葉県教育委員会の指導により、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施した。

2、周辺遺跡（第1図）

芝山町は、新東京国際空港や、県道成田松尾線等の開発に伴う発掘、また、一連の古墳の学術調査など、発掘調査例の多い地域である。大谷遺跡(1)周辺に限ってみても、空港関連では、南三里塚宮園遺跡（空港No.4遺跡）(2)、木の根拓美遺跡（空港No.6遺跡）(3)、岩山中袋遺跡（空港No.2遺跡）(4)など、旧石器のナイフ型石器、縄文早期の擦糸文系土器、沈線文系土器を出土したことで著名な遺跡が知られる。大谷遺跡の南側の台地でも、遠野台・長津遺跡(5)、小原子遺跡(6)、巢根遺跡(7)で旧石器が検出されている。縄文前期の遺跡は、長寿院台遺跡(8)、貝来土



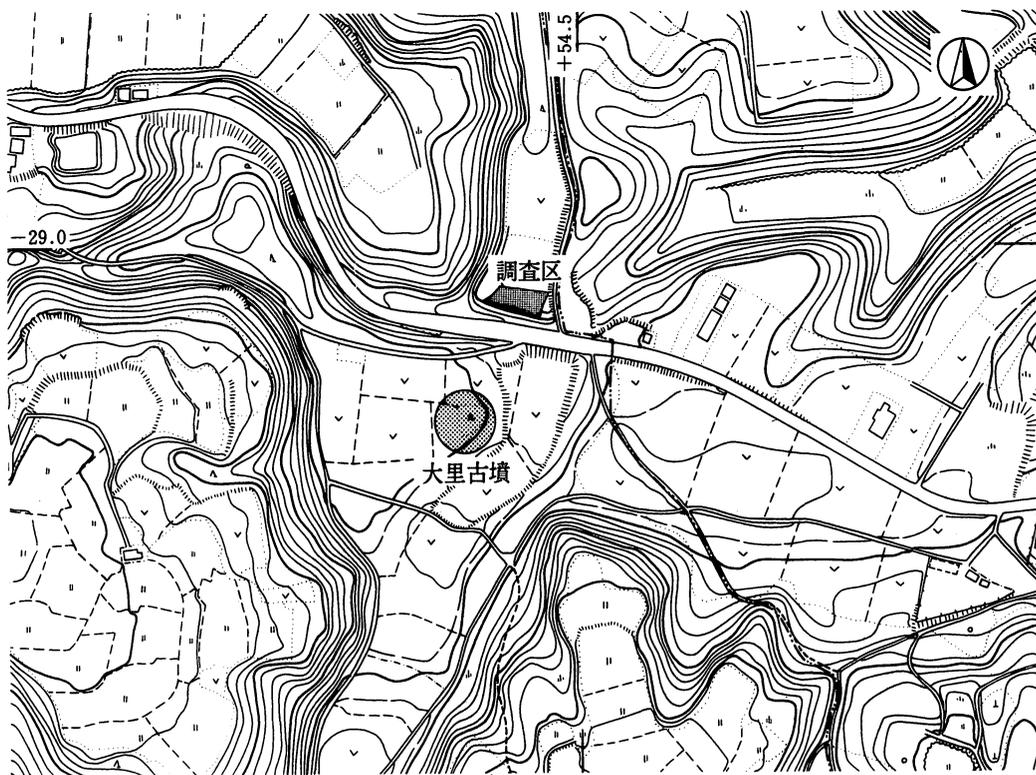
第1図 遺跡の位置と周辺遺跡(1. 大谷遺跡)

遺跡(9)などがある。遠野台・長津遺跡(5)では、弥生時代の集落跡も検出されている。古墳時代では、谷を挟んだ西側の台地に大里田辺台古墳群(10)、田辺野東古墳群(11)がある。大谷遺跡の南側には、切石積みの石棺が出土した大里古墳(12)もある。多古町になるが、大里古墳の東側には大塚古墳群(13)がある。本遺跡の北に、大殿台(加茂)古墳群(14)、一ツ塚古墳(15)がある。やや北に離れるが儘田台古墳群(16)がある。

3、遺跡の立地と環境

大谷遺跡は、下総台地東岸の太平洋に注ぐ栗山川の支流である多古橋川と高谷川に挟まれた台地で、両河川に流れる支谷が入り込んだ奥に位置する。この尾根筋は、上総・下総の国境でもあった。現在も多古町と芝山町の境界になっている。

遺跡周辺の地形は、南から北へ、下総分水嶺から続く下総台地が幅広く広がる。東側には、多古橋川へ流れる狭く緩い谷が入るが、西側は対照的に高谷川に流れる広く急な谷が広がっている。両方の谷によって本遺跡の所在する台地は、馬の背のように狭く高まっている。台地の標高は41m～42mを測り、西側の低位面の標高は12m前後で、台地との比高差は30mに達している。遺跡南側は国道296号により、また東側は土取りのために削平されている。



第2図 周辺地形図 (1/5,000)

4、調査の方法

今回の発掘調査地は、国道296号線に沿う用水路工事予定部分380㎡の範囲である。

調査区の設定は、調査対象の全域を公共座標に合わせて覆う20m×20m方眼網を設定し、大グリットとした。呼称は、北西に起点をおき、西から東へA、B、C、北から南へ1、2の名称を付け、それをさらに2m×2mの小グリットに分割し、北西隅を起点に00～99の番号をふり大小グリットを組み合わせて例えばA1-00のような呼称とした。

上層確認調査は、すでに平成5年度、遺跡9,525.59㎡のうち南側の5,000㎡を対象に山武郡市文化財センターが上層確認調査を行い、弥生時代の遺物を含む住居跡2軒、奈良・平安時代の住居跡1軒、時期不明の住居跡1軒、縄文土器を伴う土坑、炉穴及び縄文早期の遺物包含層の存在を確認している。そのため上層確認調査は実施しなかった。

今回の調査は、これらの結果をもとに、上層本調査と下層確認調査を平成6年10月3日から10月31日まで実施した。

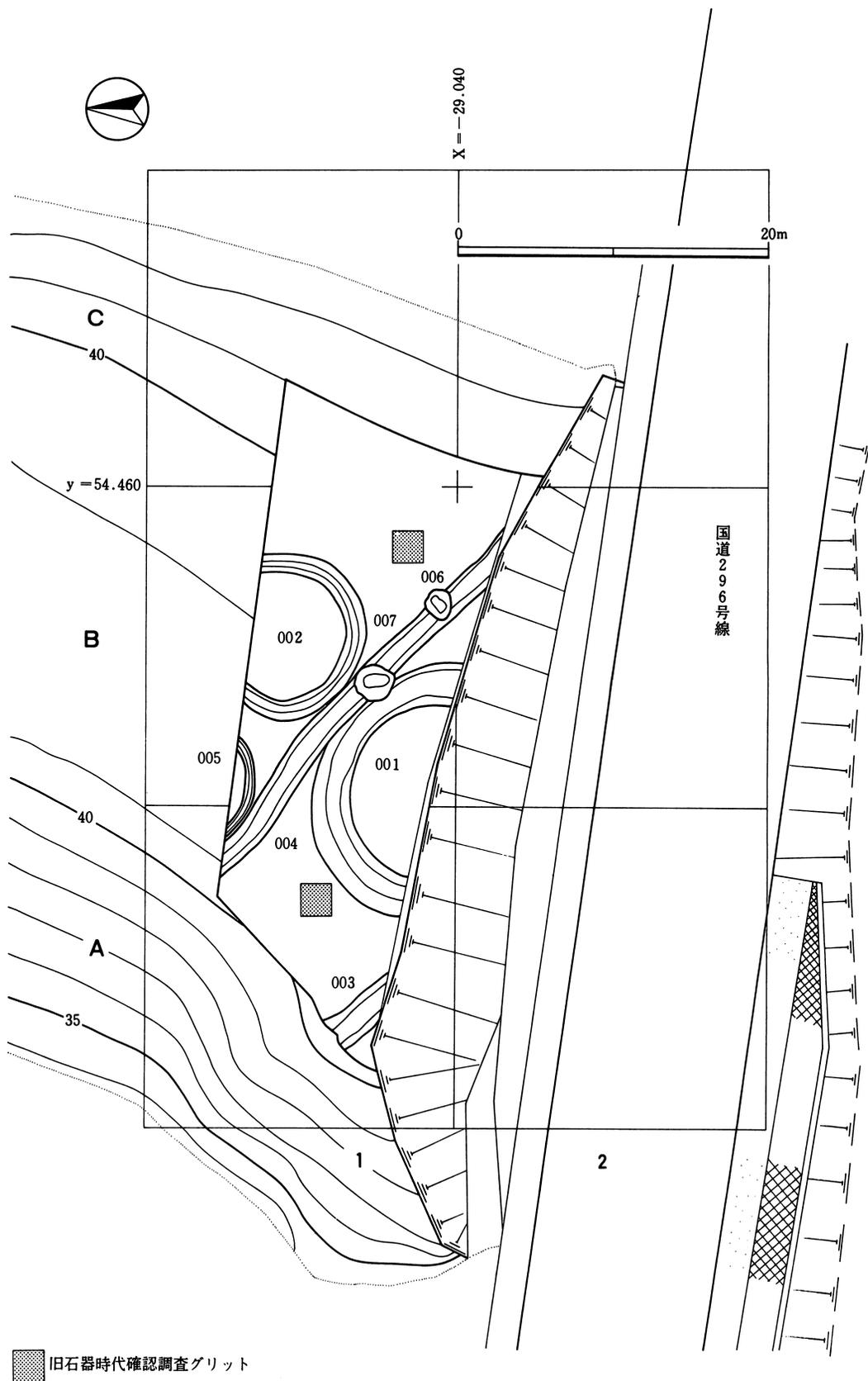
下層確認調査については、上層本調査が実施された範囲について2m×2mグリットを2か所設定し実施したが遺物は検出されず、下層本調査は実施しなかった。

遺構番号は、基本的には遺構の内容にかかわらず通し番号を使用し、3桁の番号を付した。番号は001号から始まる。整理段階で欠番が生じた場合でも、調査時に付けられた番号をそのまま使用している。本報告でも、発掘時の遺構番号をそのまま使用した。

なお、遺構の項では性格を同じくする遺構でまとめたため、遺構番号順ではないことをお断りしておく。

参考文献

芝山町教育委員会	「芝山町史」	1993
芝山町教育委員会	「芝山町内遺跡発掘調査報告書 大谷遺跡」	1994
山武考古学研究所	「小原子遺跡群」	1990
(財)千葉県文化財センター	「千葉県埋蔵文化財分布地図(2)」	1985
(財)千葉県文化財センター	「木の根」	1981
(財)千葉県文化財センター	「多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書」	1986
(財)千葉県文化財センター	「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 IV」	1984
(財)千葉県文化財センター	「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 V」	1985
(財)千葉県文化財センター	「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 VII」	1993
(財)千葉県文化財センター	「海上町岩井安町遺跡発掘調査報告書」	1994
(財)千葉県文化財センター	「東関東自動車道路埋蔵文化財発掘調査報告書 IV」	1988
(財)山武郡市文化財センター	「大台遺跡群」	1991



第3図 遺構配置図 (1/400)

5、遺構

001号跡（第4図 図版1） 調査区南側中央で検出された円墳の北半分で、既に旧表土まで削平され墳丘は存在していない。表土除去後周溝を検出した。南側は国道296号線の拡張の際に削られている。規模は東西外径16.4m、内径10.8m、周溝は幅2.4m～2.8m、深さ0.36m～0.48mで、内側の方を僅かに深く逆台形に掘りこんでいる。007号跡が周溝北東部を古墳構築後に切っている。埋葬施設は検出されなかったが、埋葬主体部に使われていた可能性のある絹雲母片岩が1点墳丘部中央で検出された。国道により削平された部分か、墳頂部に埋葬施設があったものと思われる。遺物は周溝内で土師器小片が数点出土したにすぎず、時期は不明。

002号跡（第4図 図版1） 調査区北側中央で検出された円墳である。墳丘は遺存していない。ややゆがんだ円形を呈する。規模は検出面で、東西外径10.4m、内径8.2m、周溝は幅2.4m～2.8m、深さ0.36m～0.48mである。断面形は丸底で、ほとんどが削られてしまい僅かな深さしか検出できなかった。埋葬施設は検出されなかった。遺物は、周溝内から土師器片が数点出土したにとどまり、小片のため時期は不明。

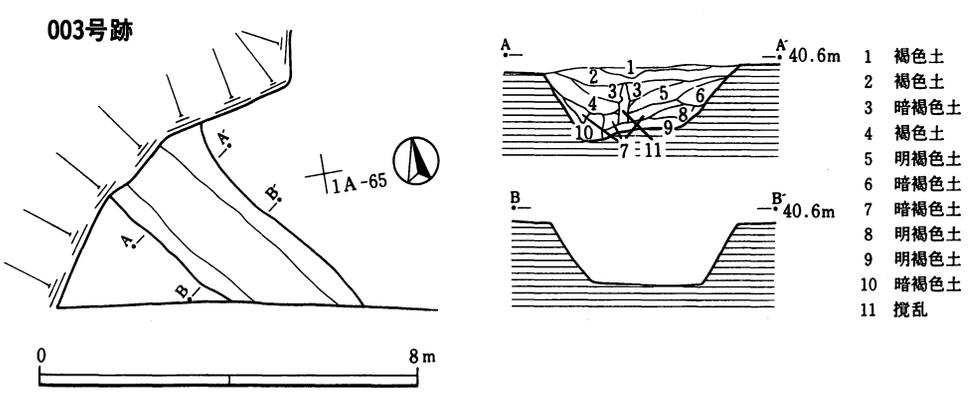
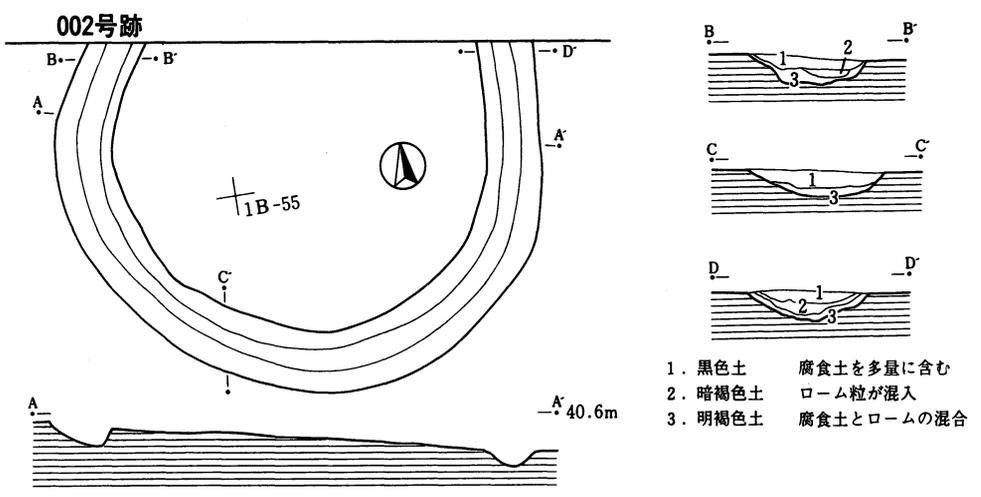
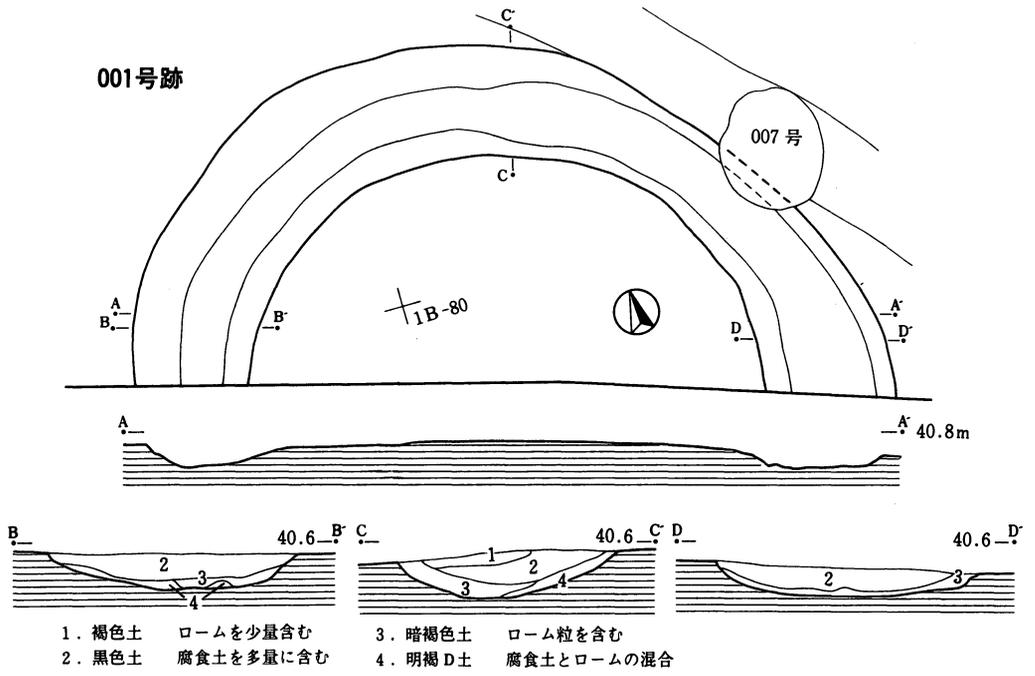
003号跡（第4図 図版1） 調査区南西隅で検出した。北側は、土取りにより消滅し、南側は国道296号線により削平されている。堀の断面は逆台形を呈し、しっかりと掘り込まれているので方墳の周溝の可能性が考えられる。規模は、長さ5.2m、幅2.0m～2.2m、深さ0.64m～0.76mである。遺物は周溝内から土師器片が数点出土したが、小片のため時期は不明。

005号跡（第5図 図版1） 調査区北西隅で検出した。円墳の一部と思われる。規模は検出された部分で東西5.6m、周溝は幅0.24m～0.28m、深さ0.36m～0.48mである。遺構に伴う遺物は検出されなかった。埋葬施設も検出されなかった。

006号跡（第5図 図版1） 調査区東南に位置し、004号跡を調査中に検出した土坑である。004号跡に切られている。平面形は楕円形である。規模は、長軸2.2m、短軸1.8m、深さ2.0mである。覆土は、レンズ状に堆積し、ほとんどの層にロームブロックを含み、しまりも悪くもろい。遺構に伴う遺物は検出されず時期は不明である。

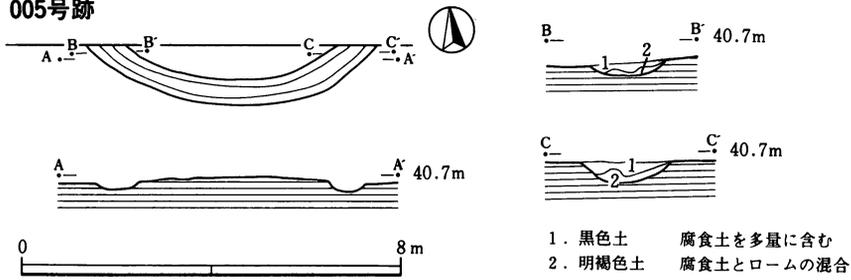
007号跡（第5図 図版1） 調査区中央やや東寄りで検出された土坑である。004号跡に切られている。平面形は楕円形であり、下のほうはやや外側に膨らむ。規模は、長軸3.2m、短軸2.2m、深さ2.8mである。土層断面を見ると、レンズ状の堆積で自然堆積と思われる。遺構に伴う遺物は検出されず、時期は不明である。

004号跡（第5図 図版1） 調査区を南東から、北西に縦断している。谷部から台地上がる溝状の遺構である。道路遺構の可能性もある。006号跡・007号跡を切っており最も新しい。調査した部分は、延長25.3m、幅1.52m～1.76m、深さ0.15m～0.4mである。遺構に伴う遺物は検出されず、時期は不明である。

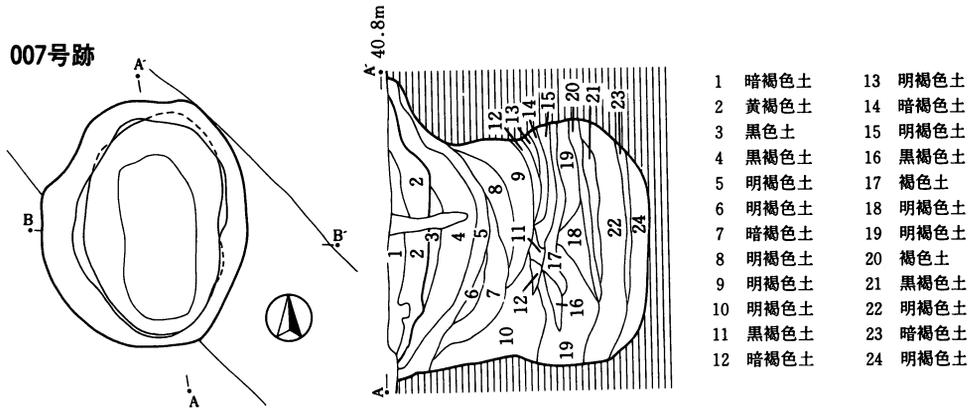


第4図 001・002・003号跡 (1/160・セクション1/80)

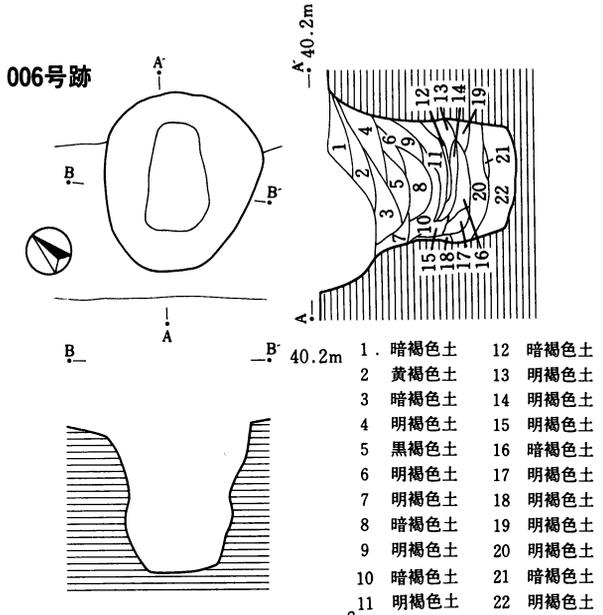
005号跡



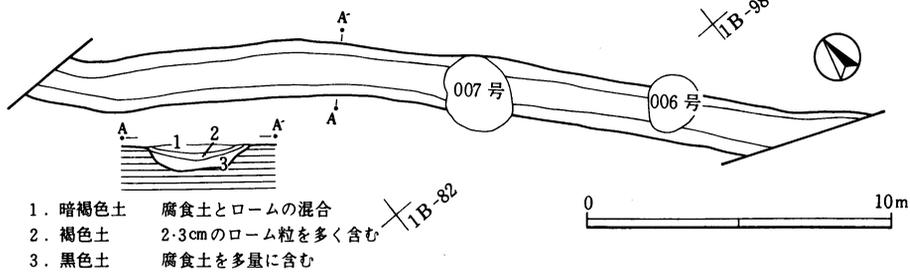
007号跡



006号跡



004号跡



第5図 005・007・006・004号跡

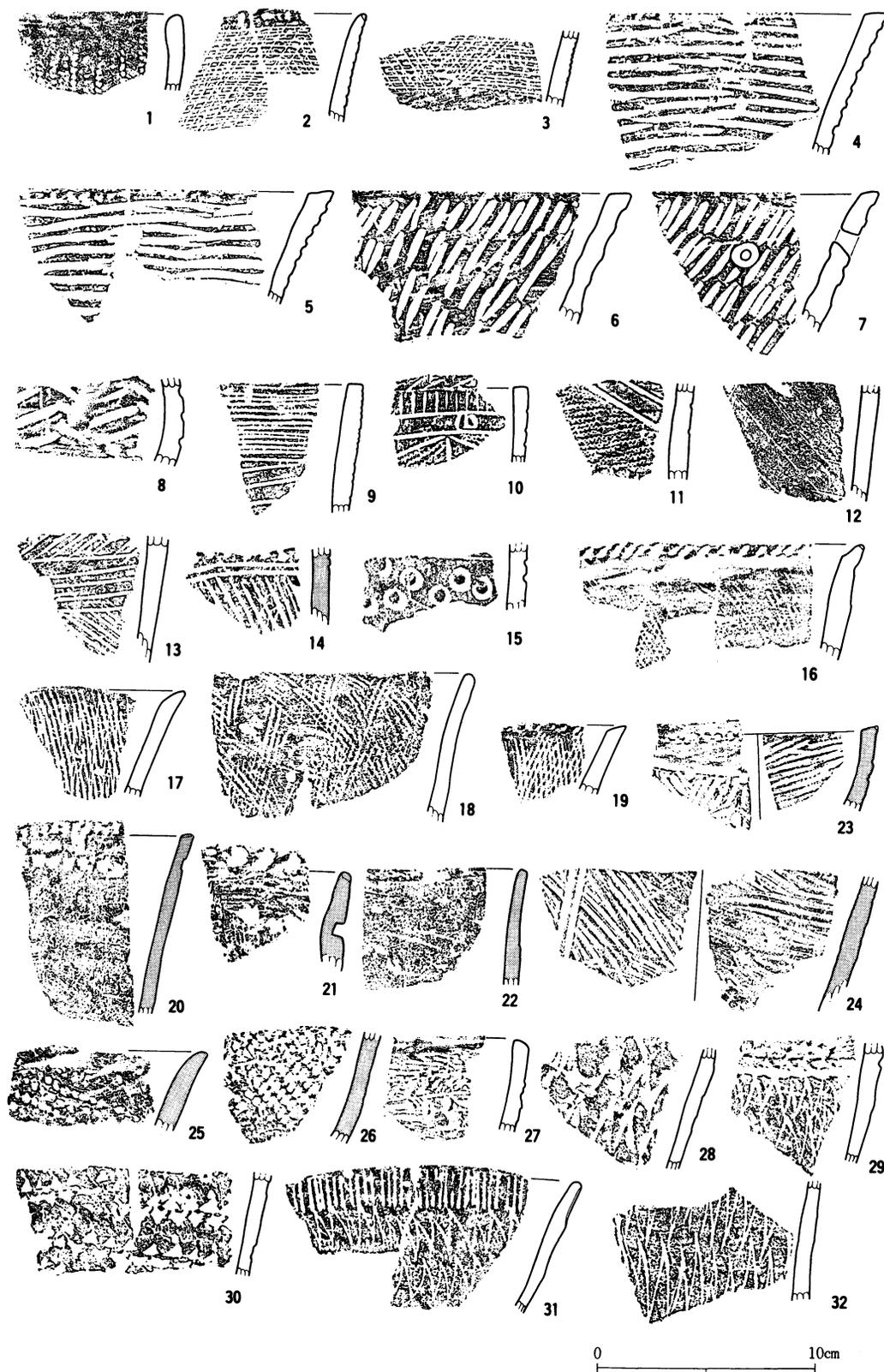
(005号1/160・セクション1/80, 007・006号1/80, 004号1/250・セクション1/125)

6. 遺物

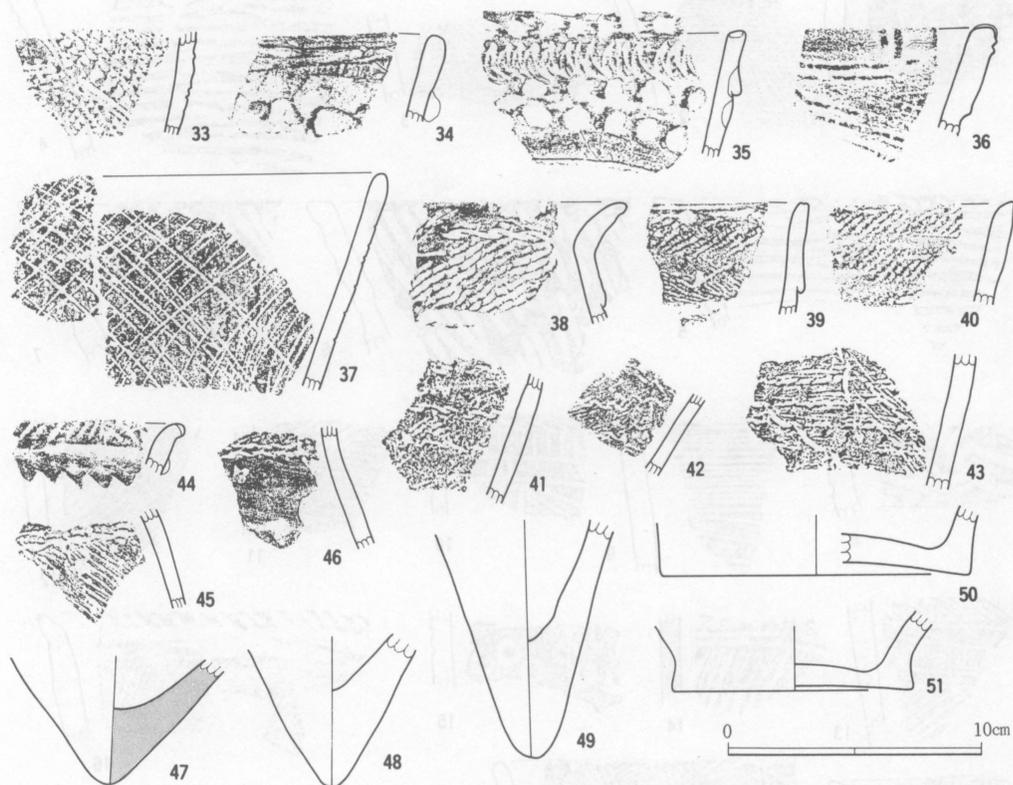
(1) 土器 (第6・7図 図版2)

本調査によって検出された土器の量は、調査が小範囲であった割には多かった。時期的には縄文時代早期、前期の土器が主体である。縄文時代中期初頭の土器、弥生土器、古墳時代土器も若干出土した。土師器については、小破片であったので図示しなかった。

1はLRの撚糸を施文している。稻荷台式に比定される。この1点のみの出土である。2、3は同一個体である。口唇部近くから横位に多条の細沈線を引き、さらに右下がりと左下がりに多条の沈線を引く。口唇部に刻みが入る。三戸式に比定される。4～8は太沈線で、横、斜め、山形に文様をつけている。4個体ほどの土器で40数片出土した。9は細沈線による横位文の下に斜めに沈線が入る。10～12は沈線の間貝殻による腹縁文をつけている。10は口縁に斜めの刻みが入り、胎土に白色の石を多く含む。13、14もやや太い沈線により区画されている。15は竹管による押位文が施されている。16は口唇部が外反し、口唇部から斜めの刻みが入る。口唇下の無文帯の下に格子状に細沈線が入る。17は同じく外反するが口唇部上部から格子目状の条痕が入る。18は口唇部から、数本単位の駕籠の目状に条痕が入る。遺跡全体でかなりの量の出土があった。19は口唇部に刻みが入り、3本単位で格子状に交差する条痕が施文される。4～19は三戸式から田戸下層式に比定される。20～22は口唇部と口縁部に刺突が入る。子母口式に比定される。23は沈線による区画と円形の刺突が入り、波状口縁で裏に条線が入る。24は斜めの条痕の上に2本の沈線が縦に入る。裏には条痕が入る。鶴ヶ島台式土器に比定される。25はまばらな縄文が施文される。26はRL縄文が施文される。黒浜式土器に比定される。27は、竹管による平行沈線の中に斜めに刺突が入る。諸磯式に比定される。28は太く粗い波状貝殻文が入る。29は変形爪形文が横位に入った下に波状貝殻文が入る。30は反対向きの2段の三角文が入る。31は薄手の口唇部から縦に細い沈線が入り下には波状貝殻文が入る。32は波状貝殻文が施文されている。33は貝殻圧痕が施文されている。34は指頭圧痕が口縁部の下に付けられている。35は口唇部に竹管による斜めの圧痕が施文され、その下に波状貝殻文と指頭圧痕が横走する。28～35は、浮島・興津系の土器に比定される。36は細い粘土紐を張りつけ竹管による刻みが入る。十三善堤式土器に比定される。37は、口唇部から細い格子目の沈線が入る。浮島式土器に比定される。38はくの字状に外反する折り返し口縁で、上部に綾繰り文が入る。39は折り返し口縁で胴部に細い縄文が施文されている。40はLR縄文が入る。41、42、43は綾繰り文が胴部に数条入る。前期末から中期初頭の土器である。44は彫刻手法の口縁で五領ヶ台式土器に比定される。45は壺の肩部に綾繰り文が入りその下に細い撚糸文が入る。46は綾繰り文の下は無文で、色は明褐色である。45、46は弥生時代後期の土器である。47～50は底部である。47は角度が緩やかな尖底。48は繊維が入り脆い。条痕文系土器の尖底である。49は田戸下層式の底部と思われる。50～51は縄文前期の土器の底部と思われる。



第6图 出土土器 (1/3)



第7図 出土土器 (1/3)

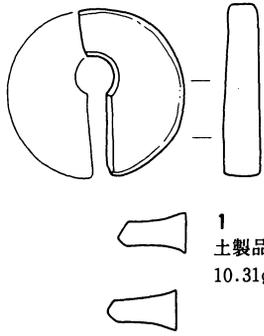
(2) 土製品 (第8図1 図版2)

土製品の出土は1点のみである。縄文前期の玦状耳飾りである。ほぼ円形をしていたと思われる、半欠品である。外枠は周囲を高く盛り上げている。へらできめ細かに調整され表面は無文である。胎土は砂を含み焼成は良好である。

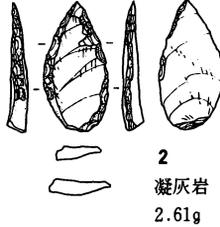
(3) 石器 (第8図2~16 図版2)

石器及び礫が調査区全体で出土した。総点数371点、内訳は旧石器時代の尖頭器1点、縄文時代草創期の有舌尖頭器1点、磨製石斧1点、敲石2点、磨石1点、石鏃8点、石鏃未成品5点、剥片7点、両極打法の剥片5点、碎片66点、二次加工してあるもの3点、使用痕があるもの3点、礫268点である。以下図示したもののみ説明する。

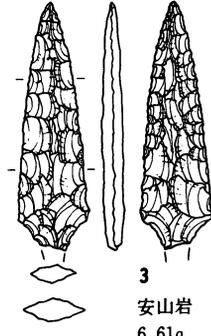
2は、旧石器時代の尖頭器である。縦長剥片を素材として、主要剥離両側から調整を施している。周辺調整の尖頭器で、石材は凝灰岩である。3は草創期の有舌尖頭器である。刃部は比較的平らで、断面もレンズ状で厚みがある。石材は安山岩である。4~12は石鏃である。4~6は比較的長く抉りは浅いもの。7、8は正三角形状で抉りが浅いもの。9、10は抉りが深いもの。11は大型で抉りも深い石鏃である。使用のため刃先及び脚部が欠けている。12は石鏃の未成品である。13は磨製石斧片、14~15は敲石である。16は磨石であるが、敲打痕を3か所伴う。



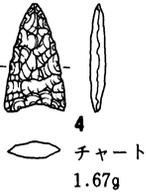
1
土製品
10.31g



2
凝灰岩
2.61g



3
安山岩
6.61g



4
チャート
1.67g



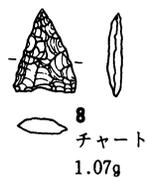
5
黒曜石
1.04g



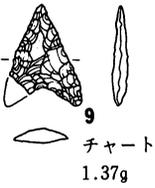
6
黒曜石
0.61g



7
黒曜石
0.94g



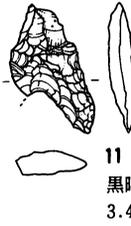
8
チャート
1.07g



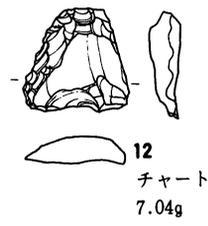
9
チャート
1.37g



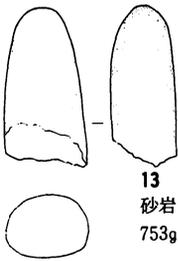
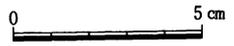
10
黒曜石
0.97g



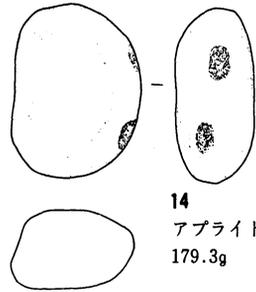
11
黒曜石
3.46g



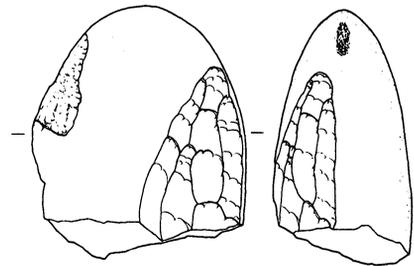
12
チャート
7.04g



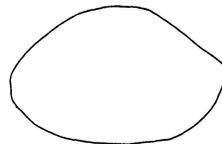
13
砂岩
753g



14
アプライト
179.3g



15
砂岩
160.2g



16
砂岩
604.7g



第8図 出土遺物

(1~12 1/2, 13~16 1/3)

7、まとめ

遺物について

縄文早期の土器片がかなりまとまって出土した。撚糸文系土器・三戸式・田戸下層式・鶴ヶ島式・子母口式・黒浜式・浮島式・興津式・五領ケ台式・弥生後期・古墳土師器まで時期の幅は長いが、縄文早期の土器が主体である。

特に本遺跡は、沈線文系の土器の割合が多く、田戸式土器でも内削ぎの口縁のものや、口唇部に刻みが入り、細沈線で格子状に文様が入るものなど、三戸式と田戸式の間形式のような土器が多いのが特徴である。三戸式の細沈線から数本単位の粗い条痕に変わっていく変化の過程が良く分かる資料群といえる。

石器は、旧石器時代の尖頭器が古墳の周溝内より出土している。今回の下層の確認調査では旧石器は検出されなかったが、空港の遺跡群、多古工業団地の遺跡群、林原子遺跡群でも、旧石器が出土しており、大谷遺跡でもまだ調査されていない部分からの出土の可能性は十分にある。草創期では、土器は出土していないが有舌尖頭器が1点出土している。黒曜石やチャートの碎片、剥片もかなりまとまって出土した。素材としての石も多数検出したこと、石鏃未成品の存在など製作工程が把握できる遺物が出土したことから、石器製作跡があった可能性が高い。図示しなかったが2か所で剥片などが集中する傾向を捉えることができた。

礫も多数出土した。円礫は268点で、その中で火を受けているもの42点、破碎礫は123点の中で115点が火を受けている。破碎礫で接合できるものは10個体程度あった。焼礫は、炉ないし、調理の道具として使われたのではなかろうか。礫の所属時期は、早期の三戸式土器・田戸下層式に伴って検出していることから、この時期のものともみて間違いなかろう。

古墳について

大谷遺跡は、畑として耕作されたり、その後、植林され森林となっており、調査が始まる以前に、既に墳丘は崩されており古墳の存在は認められなかった。今回の調査で、表土を剥いだ段階ではじめて、4基の古墳があったことが確認された。これらの古墳は、以前に調査された大里古墳からわずか30mしか離れておらず、大里古墳群に含まれるものである。

大里古墳からさらに50m南には遠野台・長津遺跡があり、弥生時代、古墳時代の集落跡が検出されており、本遺跡でも北側の未本調査部分に、確認調査の段階で住居跡が検出されており、それが集落域の限界であって、今回の調査部分から大里古墳にかけての範囲が墓域であった可能性が考えられる。古墳の時期については、埋葬施設が確認されず、石棺の可能性のある絹雲母片岩の小破片が1点と、周溝内で土師器の小破片が数点出土したのみで、遺物からは時期を決定することができないが、大里古墳と同じ群内の古墳と見られることから、古墳時代後期と考えることができる。

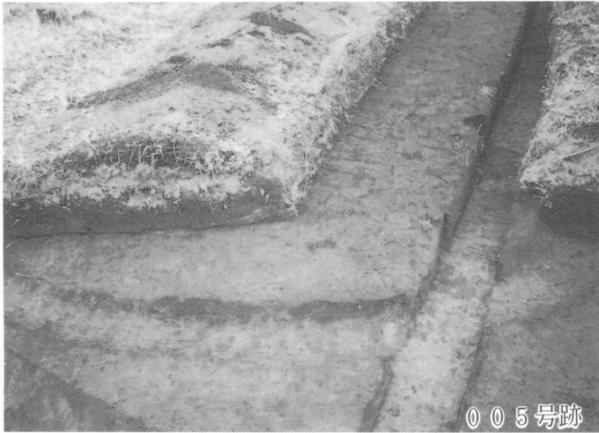
写 真 图 版



調査区全景



001号跡



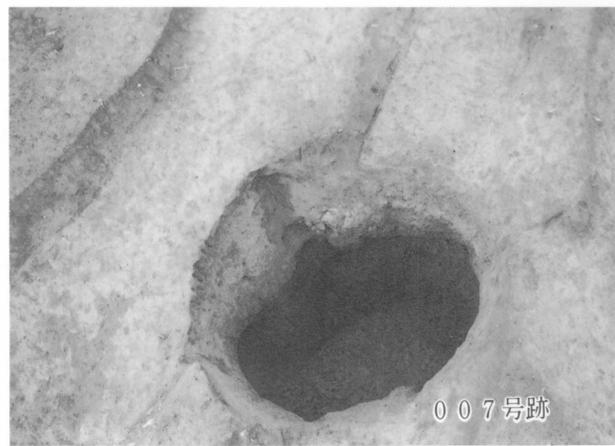
005号跡



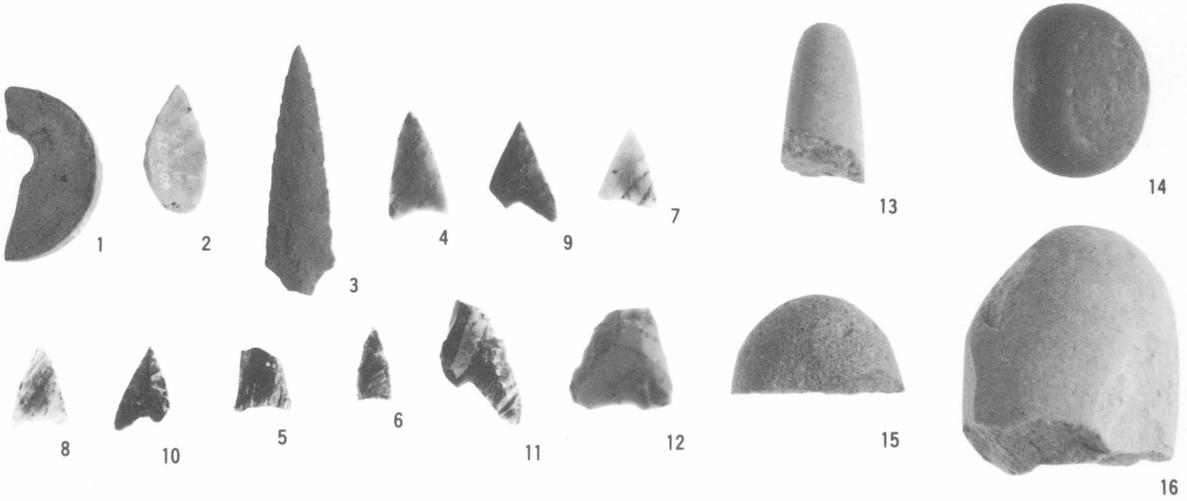
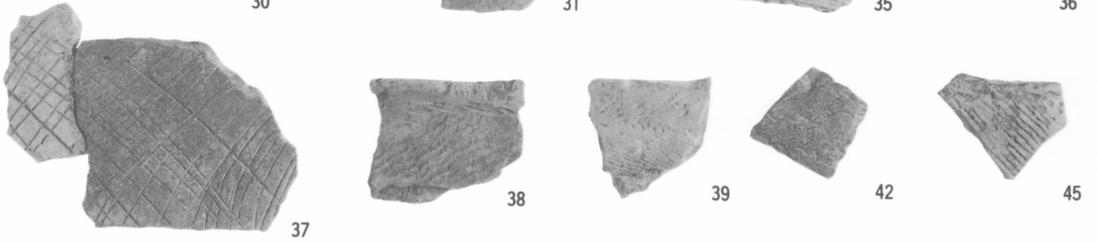
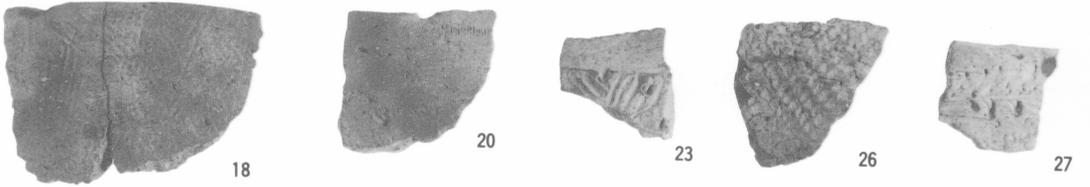
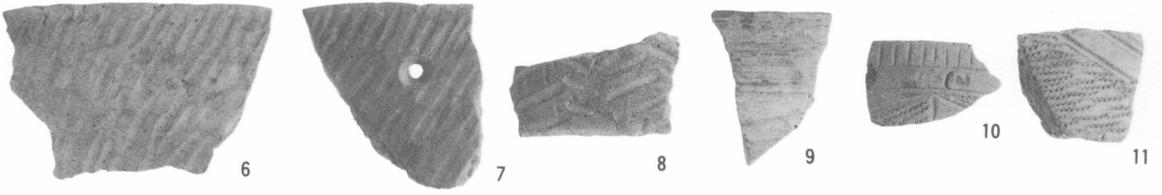
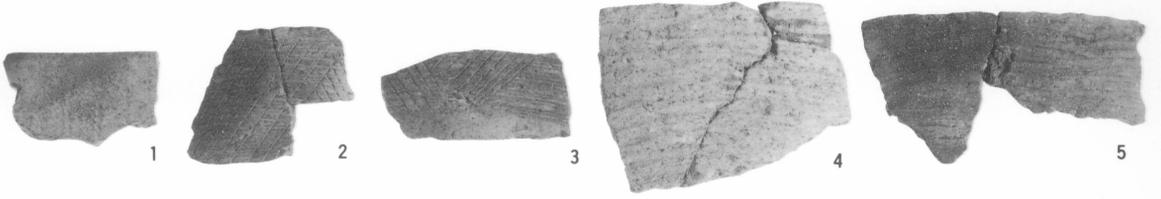
006号跡



002号跡
004号跡



007号跡



報告書抄録

ふりがな	しばやままちおおたにいせき							
書名	芝山町大谷遺跡							
副書名	北総中央農業水利事業2号送水路その24工事に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第273集							
編著者名	平野雅一							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811							
発行年月日	1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおたにいせき 大谷遺跡	ちばけんさんぶぐん 千葉県山武郡 しばやままちおおたとあざ 芝山町大里字 おおたにい 大谷1075-1	12409	029	35度 44分 10秒	140度 26分 10秒	19941003 ～ 19941031	380㎡	送水路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大谷遺跡	包含地	旧石器		尖頭器		縄文土器片を含む遺物包含層が検出された。		
		縄文	包含層	稲荷台式、三戸式、田戸下層式、浮島式、興津式、五領ヶ台式、十三菩提式土器、有舌尖頭器、石鏃、敲石、磨石、块状耳飾り				
	弥生		土器片					
	古墳	古墳	古墳4基	土師器片				
	不明		溝状遺構 土坑					

千葉県文化財センター調査報告第273集

芝山町大谷遺跡

北総中央農業水利事業2号送水路その24工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成7年3月24日 印刷

平成7年3月31日 発行

発行 関東農政局千葉北部農業水利事務所
千葉県八街市八街に456-1

編集 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印刷 株式会社 エリート印刷
茨城県牛久市柏田3269
